

怨靈等、妄報之雲を拂ひ、三之毒水を解き、速に木來空に歸還すべし、骨は骨身は身に分けて見るときは其みなもとは
同し水なり、討つ人も討るゝ人も諸共に如く露亦如く電應レ作三如 是觀。

武者塚

武者塚とは戦終りたる後敵味方ノ死骸を厚埋して其上に塚を築く事なり敵といへども其屍をいやしくせず能葬ること武
士ノ情けにして且禮法也戰場にて敵を追崩し味方勝軍のとき軍監之役味方の手負死人を改め手負は助け歸り死人は下着
甲冑を剥き取らず其儘に一所にまとめ葬り南向の塚を築き敵の手負人有らば味方の陣屋に負ひ來りて叮嚀に醫療を加へ
死人は見苦敷赤裸にせず一所にあつめて埋め北向に塚をきづく敵の主將其外名高き大將を討取りたる時は其首に甲冑太
刀類の遺物を添へ出家に持せ敵の古郷に送り若不知時は其邊の寺院に課せて厚葬らせ乗馬武具類其寺院に納て布施物と
す○味方勝軍すと云とも其戰場を直に逃し他所に營舎を構ときは軍監の役を殘置近邊寺院僧俗を使右武者塚をきつかす
ることを課役せしむべし是敵を感服せしむる謀而已にあらず武門の禮儀也。

叙上一柳先生の書翰に『生捕は叮嚀之御構置』とある如く、七月十九日禁門の變で、生捕となつた長人十名を南洲翁等
の取計で、金品を與へ帶刀を許して岩國へ返還されたのである。此の武士の情の籠れる懇篤なる所置がやがて薩長聯合の
基因を爲したもので、今尙ほ人口に膾炙する所である。即ち生捕人に對し本藩に於て苛酷の所置なきやう希望條件を付し
て、書を岩國藩の香川・山田兩士に贈られた。其の文左の如くである。

前略去る七月十九日幣藩手へ生捕相成候者共此度召列當所へ罷越候就ては右者共口柄相調へ候處元來卑賤陪從の輩にて是

会津攻めに圧倒的な冴えを見せた

隻眼隻脚、新政府軍の軍師

伊地知正治、伝記の決定版、初復刻



伊地知正治小伝

鹿児島県教育会編



マツノ書店

限定300部復刻

其一 緒言

私がこゝに語らんとする伯は、伯の總てではない。單に明治維新に際し、東山道總督府及び其後身たる會津追討白河口總督府の參謀としての伯、即ち自から兵を率ゐての伯を語らんとするのである。勿論伯は自から劍を執つて、陣頭に立つが如き闘將ではない。謀を帷幄に運らすの智將である。然しながら單に智を備へたのみでは參謀の要職に其任を全ふし得るものではない。古より兵に將たるは尙易く、將に將たるを難しとして居る。今日如何に科學兵器が進歩し、如何なる機械化兵團によつて戦闘せらるゝとも、この諺は尙嚴として動かない。況んや兵裝戰術の如き未だ全く近代化せず、彼我共に新舊著しく相混在した、明治維新當時に於てをやである。即ち統帥其良しきを得なければならぬ。これには智と勇との外に徳望も兼ね備はらねばならない。然かも當時伯の旗下東山軍薩軍を見ると、其部將は悉くこれ鐵中錚々の士、恰も驛馬の如く、一度轡を謬れば、千里奔逸又爲す所を知らざるの類。伯にして始めて統帥の實を擧げ得たのである。

維新當時に於ける參謀は、今日の參謀とは大に其趣きを異にする。總督たる人は多くは門地高き人々で實際の武將でない。軍略は參謀によつて決せらるゝのみならず、參謀自から兵を指揮することも多い。名こそ參謀であるが、事實上の指揮官である。

其二 東山道東征軍の指導

一、東山道東征軍の編成

其七 會津攻陥

一、討會の軍議並に計畫

七月二十九日官軍二本松城に據り、其後方を整備し、特に白河―須賀川―二本松道を完全に領有した。そこで爾後の作戦に就て、色々と評議せられ、八月五日には二本松より板垣參謀、川村與十郎、池上四郎左衛門等は白河に赴き、伯と軍議する所があつた。この作戦に就ては、仙台、米澤の攻撃案、會津米澤同時攻撃案の如きも存したが、板垣も伯も共に會津專攻案であつたから、八月十六日の軍議で全力を以て會津攻撃、當時所謂『敵巢を敗崩すれば枝葉枯落す』の大方針が立てられた^①。更に討會案に就て検討せられたが、當時二本松より會津に向ふ進路は、中山口、御靈櫃口、石筵口の三道があつたから、又々議論は岐れた。特に伯は石筵口を、板垣は御靈櫃口の意見で夫々相對峙した。板垣の理由とする所は『猪苗代方面には十六橋の嶮があり、敵もし頑強に抵抗したならば、我攻撃停頓の恐れがある。且つ同方面は米澤藩に近いから側面を脅威せらるゝの不利もある。』伯の理由に就ては記する所がないが、自説は杜げない。遂に石筵、御靈櫃兩道併進案が議定せらるゝ所があり且つ行動發起を八月二十日と議定せられた。所が十九日に至り終に板垣の讓歩する所となり石筵より保成峠（保奈利、母成、房成等と書す）を全兵力を擧げて攻撃前進する伯の案が用いらるゝに至つた。こゝにも伯の功績がある。以下述ぶる如く此案の實施により、僅か三日を出でずして、敵の牙城若松に迫ることになつたのであるから、伯の自案固執こそ、討會作戦に洩し得ざるものである。



新政府軍の軍師・伊地知正治唯一の伝記 『伊地知正治小伝』を推薦する

戦史研究家 長南政義

「新政府軍の軍師」、伊地知正治にはこの譬えがふさわしい。伊地知は薩摩藩士で、幕末期に結成された精忠組に加わり、西郷隆盛や大久保利通と国事に執掌した勤王の志士である。幼少期に大病を患い片眼と片脚が不自由であったにもかかわらず、剣術は薬丸自顕流を、兵学は合伝流兵法を修めた、文武両道の士であった。合伝流の弟子には、西郷隆盛の弟である西郷従道や、明治期に土木県令と称された三島通庸がいる。

片眼、片脚が不自由な軍師といえ、戦国時代の山本勘助の名が第一にあがるが、幕末新政府軍の参謀として、戊辰戦争期に大活躍したのが、山本勘助と同じく隻眼隻脚の伊地知であった。戊辰動乱の時期、伊地知は小御所会議に際して官門警備の任に当たり、鳥羽伏見の戦いでは西郷隆盛と共に鳥羽の薩摩軍の統帥に参与して機宜の処置をなしている。鳥羽伏見の戦いの後、伊地知は戊辰戦争に東山道先鋒総督府参謀として東征する。本書所収の「将帥としての伊地知正治」で大山柏が説明しているように、当時の参謀は、参謀といっても現在の参謀とはその役割を大きく異にする。総督には門地が高い人物が就くので実際の戦将ではない。そのため、軍略は参謀が決定し、参謀みずから兵を指揮することも多く、参謀は「名こそ参謀であるが、事実上の指揮官」なのである。

戊辰戦争における伊地知の頭脳の冴えは伝説的だ。戊辰戦争の戦局の帰趨に大きな影響を与えた白河口の戦いにおいて、伊地知は白河城に拠点を置く二千五百名の旧幕府軍に対して、その三分の一にも満たないわずか七百名の戦力で包囲攻撃を実施し、旧幕府軍を撃破している。「軍師」伊地知最大の見せ場は会津攻めである。伊地知は、奥羽越列藩同盟に対する攻撃方針をめぐって、「枝葉（会津藩以外の奥羽越列藩同盟諸藩）を刈って、根元（会津藩）を枯らす」と仙台・米沢への進攻を主張する大村益次郎に反対し、「根元を刈って、枝葉を枯らす」べきであると、して会津攻略を主張し、自身の意見を通すことに成功した。さらに、会津攻めに際しては、進行ルートをめぐる、伊地知は参謀板垣退助と論戦を戦わす。すなわち、伊地知は、御霊櫃口を提案する参謀板垣退助の意見に反対し、石筵口を主張し、長州藩士百村発蔵の仲裁で、伊地知案が採用されたのである。伊地知案を採用した新政府軍は、旧幕府軍を大破して会津若松城を攻略することに成功している。戊辰戦争における「軍師」伊地知の功績は大であったといえる。

本書は諸史料や諸証言を典拠とした「伯爵伊地知正治先生小伝」で幕を開ける。小伝というと、無味乾燥な対象人物の簡単な略歴を連想する読者が多いかもしれないが、本小伝に限ってはそのようなことはなく、藩主から伊地知に宛てて出された文書や、大久保利通宛ての伊地知書簡、関係者の談話が随所に引用され、読ませる内容となっている。たとえば、大政奉還後、徳川慶喜が兵を率い京師から大坂城に下った際に、周囲の関係者が安堵する中、伊地知は「古より兵を此地に受て未だ勝者有るを聞かず。今東軍の退く其意測知るべからず、彼若し大阪城に抛り、水師以て兵庫を扼し我糧道を絶ち、関東の兵を以て海道より進撃せば、我軍殆んど死地に陥て計の施すへきなし」と述べ、京都で旧幕府軍を迎撃することの不利を指摘したうえで、敗戦に備えて予め丹波・丹後・但馬に兵を置いてこの地方を一朝有事の際の根拠地とすべきことを提案して、この策が採られたとする。

また、先に言及した奥羽越列藩同盟に対する攻撃方法に関しても、本書に登場する伊地知の発言は「会津は賊軍の根帯なり。仙台以下は其枝葉なり。今其根を断ては則其枝は随て枯れん。且今より三旬を過くれは、氷雪地を埋て容易に若松城下に入るへからず。豈に此好機を失ふへけんや」となっており、より生々しい表現になっている。

戊辰戦争での活躍からもわかるように、本書の白眉は、伊地知の指揮下で戦った大山巖の嗣子・大山柏執筆による「将帥としての伊地知正治」である。大山柏自身が陸軍少佐であるうえに、戊辰戦史の名著『戊辰役戦史』の著者として名高い人物でもあるため、その分析は読む人を引き込む磁力を持っている。たとえば、「将帥としての伊

地知正治」の結言で大山柏は、伊地知の軍才の卓越さは、多くの戦例を羅列する必要は無く、白河口の戦いのみを挙げれば十分であるとし、敵に勝る万余の大兵を動かしながら河井継之助の戦術に翻弄されて悪戦苦闘を重ねた越後口方面の戦役と比較して、寡兵で敵の大軍を殲滅させた伊地知の作戦手腕を激賞している。

この他にも、本書には伊地知と共に精忠組の志士として幕末期に王事に執掌した大久保利通の息子である大久保利武が書いた「伊地知正治先生を憶ふ」や、伊地知の合伝流の弟子であった西郷従道の息子が執筆した「一柳先生伊地知正治伯の逸事遺聞」が収録されていて、いずれも関係者しか知らないエピソードが満載されている。

本書は小伝ではあるものの、鹿児島県教育会が編纂した伊地知伝の決定版であり、内容も客観的で信頼できるものとなっている。初版刊行時に発行された部数も少なかったため、今では稀覯本であり古書店で見かけることも稀である。戊辰戦争を語るうえで伊地知の活躍は外せないが、伊地知の基本史料が本書である。今回の復刻を機会に多くの読者が本書を繙かれることを期待したい。



伯爵伊地知正治先生小傳……………	家村 助太郎
伊地知正治先生を憶ふ……………	大久保 利武
將帥としての伊地知正治……………	大山 柏
一柳 伊地知正治伯の逸事遺聞……………	西郷 從徳
島津 田島伊地知氏記……………	池田 米男
伊地知先生と予の父……………	岩元 禧
一柳先生の逸事一、三……………	池田 米男
田島天神廟参詣の記……………	福元

■ 体裁

A5判並製函入・二二六頁

■ 予約特価 四千元 (税込四三三〇円) (送料別)

■ 定 価 五千元 (税込五四〇〇円) (送料別)

■ 特価締切 29年7月31日 (厳守)

■ 発売 29年8月上旬予定

限定二百部復刻

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

●セット特価をご利用下さい。

山口県周南市銀座2-13 マツノ書店

TEL 0834-222955 URL <http://www.matsuno.com>

内容見本

伯爵 伊地知正治先生小傳

家 村 助 太 郎 述

伊地知氏は其姓平氏祖先は遠く畠山重忠に出づ。日向の守護職伊地知彈正少弼季隨の苗裔なり。先生は文政十一年戊子六月二十七日を以て、鹿兒島城下千石馬場に生る。父は勝太郎後に六郎と稱し、諱を季平と云ふ。母は黒田氏先生は其次男なり。兄を權左衛門と云ひ、諱は季梁と稱す。先生幼名を龍駒と呼ぶ。後に龍右衛門と稱し、又正治と改む。諱は季靖と云ふ。一柳と號す。人と爲り容貌醜異、身長五尺に満たず。左目微眇にして、行歩槃踞右足廢れる。一見實に奇相なりと、天資豪邁にして膽畧あり。剛直果斷にして奇言奇行を以て世人を驚かす。幼(三歳)にして父を喪ふ、天保十年先生年甫十二、四書の素讀を伴野助七の門に受く。岡より才器あるを以て、學問日に進て衆を凌く、同門の伴侶は其異相を説て、二三の綽名(片目の勘助等)を附す。即平然として曰く、身體髮膚は之を父母に受く、容貌は關心せず、戰爭に勝ては則可也と。年十六にして藩主島津齊興公の御前に拜謁して、御目見の榮を玉はる。時に西郷吉之助、吉井幸輔、大久保一藏と親く交を結て國家の形勢を論す。吉之助は正治の卓見あるに服して、殊に親交ありしと云ふ。弘化二年家政振はす、萩原小路清瀧川の邊に居を移せり。同四年造士館の句讀師に擧る。嘉永元年六月十七日母を喪ふ時に年二十一、庭訓肝に銘し悲痛胸に盈つ。先生初は伊敷村の石澤六郎の門に入て合傳流の兵學を脩業す。抑も合傳流は薩藩の徳田小藤次(魯興)、山縣大貳に學得て傳授の證を受け、薩摩に歸りて之を傳ふ。享和には津曲善十郎、文化には永田良武文政には郡山經資、